訪タイ報告書（６回目）

2025 年 3 月 31 日

加藤　昭宏

1．はじめに

　今回 6 回目の訪問である。これまでの現地調査から、チェンダオ山間部にある BAN KHUN KHONG（以下、A 村。チェンマイ都市部から 120km 離れている）、および A 村の子どもたちが通う学校 โรงเรียนพัฒนาต้นน้ำขุนคอง（以下、B 学校）の状況として、以下のことが確認されていた。

・B 学校の先生曰く「勉強に対する意欲がない子どもが多い」。

「将来、何の仕事をしたいか？と尋ねても、畑仕事以外を知らず「わからない」と答える子が多い。

この背景として「チェンマイ市街地まで遠く離れているため、本物の仕事を見たことがないからである」。

・「職業体験を企画したいが、学校もお金がなく、企画を出来ない現状がある」。

「各家庭からお金を出してもらうと、特にお金がない家庭は参加できなくなってしまう」。

・「日本での経験や文化について話してもらえると、子ども達の世界が広がる」（以下、国際福祉教育）。

　これらのことから今回の訪問の目的は、**①国際福祉教育を実施すること（2 回目）**、②職業体験の企画を B 学校の先生と詰めること、③寄付金を渡すこと、そして④リス族が作ったものなどを購入すること（そしてそれを再度日本で販売し、売り上げを②職業体験企画の資金とすること）の 4 点とした。

　今回も、学生が４名（うち筆者のゼミ生が３名（4 年生１名、３年生２名））同行希望があり、同行することとなった。同行にあたっては、学内の関係各所と調整し、保護者の合意を得た上で渡航した。

2．全体の行程について

○1 日目　2025.3.6（木）

・セントレアにて学生 3 名と集合。バンコク（スワンナプーム国際空港）経由で 11 時半にチェンマイへ。

・料理教室用の食材の買い出し。その後もう１名の学生（カンボジア経由でタイ入り）と合流し A 村へ。

○2 日目　2025.3.7（金）

・B 学校へ。①国際福祉教育を実施。授業後、急遽、料理教室も同日に実施することに。

○3 日目　2025.3.8（土）

・村あるきを実施。不登校の児童宅 2 世帯（うち 1 世帯は学校へ行けるようになっている）へ訪問。

・その後、年に 1 度のリス族の伝統的なお祭りに参加をさせていただく。

○4 日目　2025.3.9（日）

・村周辺のカフェや国立公園へ。リス族の方へインタビューを実施。

○5 日目　2025.3.10（月）

・学校にて挨拶後、チェンマイ都市部へ。④リス族が作ったものなどを購入。学生１名と解散。

○6 日目　2025.3.11（火）

・チェンマイ都市部で④リス族が作ったものなどを購入。現地でリス族の関するヒアリングを実施。

夜、チェンマイを発ち、バンコク経由でセントレアへ（12 日朝着）。

3．①国際福祉教育の実施（3/7（金））

前回から窓口となってくれている音楽の先生（以下、C 先生）へ事前に、3/7（金）に B 学校での授業（2 回目）を行いたいことをお伝えして渡航に至った（また 4.や５.で詳述するが、自由参加型のプログラムとして、3/8（土）に料理教室、3/9（日）に村あるきを予定していた）。

また国際福祉教育の実施にあたっては、現 4 年生のゼミ生とともに準備を進めてきた。具体的には、前回の講義内容やその反省等を踏まえ、今回は「職業」をテーマに、平易な内容で、

①どんな仕事を知っているか？を尋ねる
→②イラストを各参加者に見せながら、どんな仕事があるかを探してもらう
→③そして、やってみたい、興味がある仕事を見つけてもらう
※イラスト内に、料理人や観光案内人（ツーリスト）を入れて、自由参加型のプログラム（料理教室や村あるき）と連動させる

という流れで考えていくこととした。

また**メインテーマ**を**「リス族の子どもたちが将来の夢を描けるようになること」**として、**サブテーマ**を**「職業選択の幅が広がること」「学習意欲が向上すること」「自己肯定感があがること」**の 3 点とした。加えてここでは、リス族の現状を分析し、以下の**「負の循環ループ」**があるのではと仮定した。

①（教育、世帯、地理的要因の影響があり）将来の夢を描けない・仕事を知らない
→②勉強の意欲がない
→③進学率が低い
→④親の仕事を手伝うのみ（あるいは都市部への出稼ぎ等）→①へ…
※また③④から⑤大麻の使用へつながることもある

以上の仮定のもと**「国際福祉教育実践を通して負の循環ループを断ち切りたい」**という議論があった。これらの議論をベースに、当日のプログラムや講義資料の検討を行った。

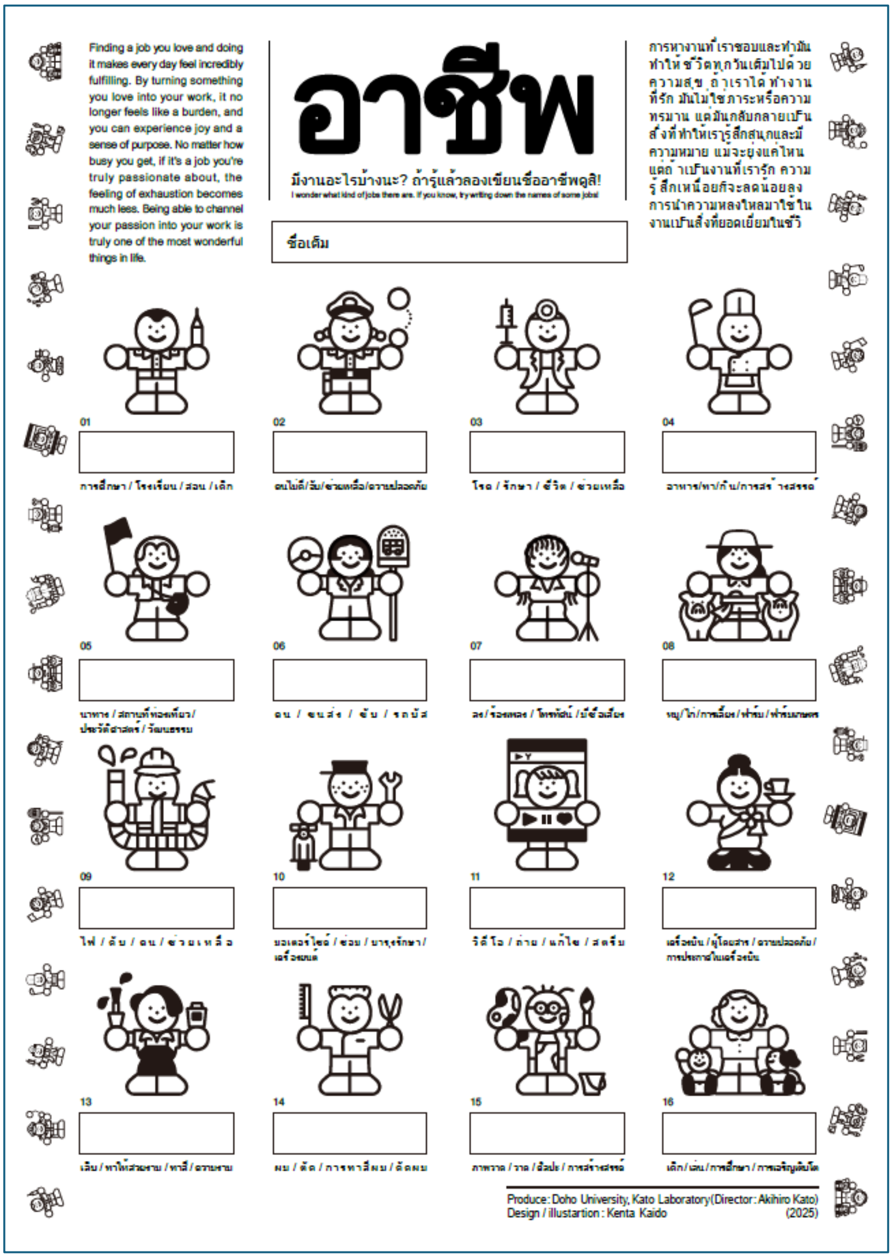
職業については、検討の結果以下の 16 の職業を紹介することとした。ここでは、既に子どもたちの多くが知っていると思われる職業（警察、教員、医師）だけでなく、知らないと思われる仕事も載せることとした。

具体的には、教員、警察、医師、料理人、観光案内人、バスの運転手、芸能人、（畜産）農家、消防士、バイクの整備士、YouTuber、CA、ネイリスト、美容師、絵描き（イラストレーター）、保育士である。

次に、授業で使う教材として、職業一覧、また講義後の配布資料として、職業の詳細を書ける紙や、なりたい将来（就きたい職業）から逆算して「今、何をするべきか」を考えられるような教材（すごろく）を検討することとした。これらの検討については、加藤ゼミ内で議論を進めつつ、本学園・名古屋造形大学の出身であるイラストレーター：海道建太氏の協力のもと、教材作成を行った。

出来上がった制作物としては、以下のとおりである。

○職業一覧（授業内で使用）



・タイトル

「仕事」 ：どんな仕事があるかな？知っているなら、職業名を書いてみて！

・上部メッセージ

自分の好きな仕事を見つけ、働いていると毎日がとても充実したものになります。

好きなことを仕事にすることで、仕事は苦痛ではなく、楽しさややりがいを感じることができるから。

どんなに忙しくても自分が心から好きな仕事なら、つらいと感じることは少なくなります。

自分の情熱を仕事に活かすことができるのは、人生において非常に素晴らしいことなんです。

・各イラスト下部

それぞれの職業のヒント。例：教育/学校/教える/子ども（01：教師）

○スタンプの台紙

未来の自分

職業名＿＿＿＿＿＿

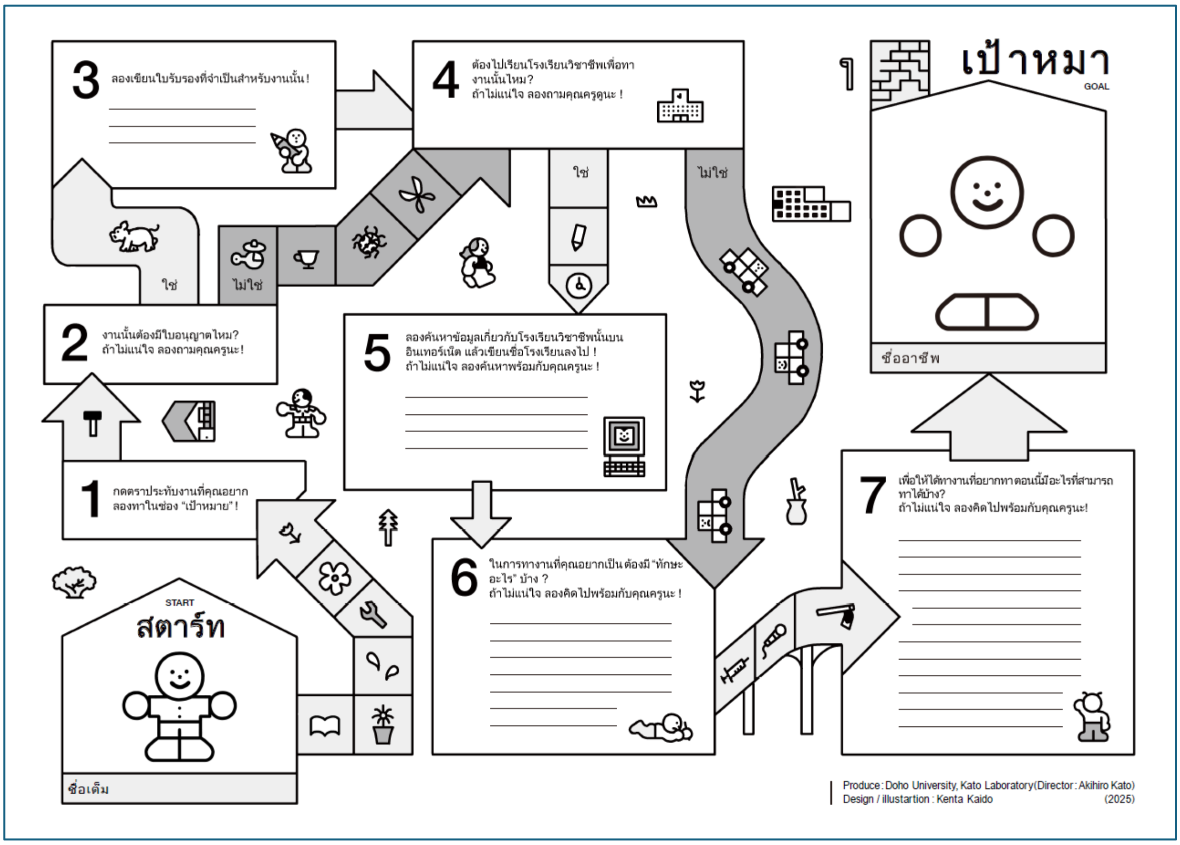
あなたがやりたい仕事の

スタンプを押してみよう！

この仕事は何をするの？

名前＿＿＿＿＿＿

○すごろく



すごろくには、それぞれの欄に以下の文言を記述した。

1　「ゴール」の欄に、やってみたい仕事のスタンプを押してみよう！

2　その仕事には「資格」はいるかな？わからなかったら、先生に聞いてみてね！

3　その仕事には、どのような「資格」が必要か書いてみてね！

4　その仕事に就くためには、専門学校に行く必要はありますか？
　わからなかったら、先生に聞いてみてね！

5　その専門学校について、インターネットで調べて、学校名を書いてみよう！
　わからなかったら、先生と一緒に調べてね！

6　あなたがなりたい仕事に就くためには、「どんな能力」が必要ですか？
　わからなかったら、先生と一緒に考えてね！

7　なりたい仕事に就くために、今、何ができるか考えてみてね！
　わからなかったら、先生と一緒に考えてね！

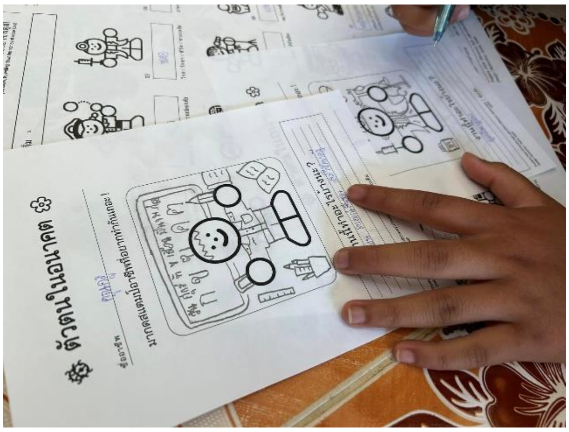
これらの資料に加え「職業スタンプ」を作成した。これをスタンプの台紙やすごろくに押して、子どもたちが楽しみながら学び、将来について考えられるよう工夫をした。

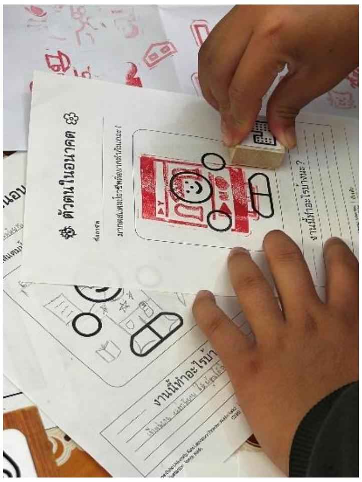
スタンプは、台紙やすごろく（右上）のように、もともと印刷している「人間」に重ねる形でスタンプを押すことで、様々な職業になれることをイメージして、スタンプを押すことで一つのイラストが完成するようなデザインを作成してもらった。デザインから実際のスタンプの作成（木材の加工、ゴム部分の切り出し、接着等）も全て、海道氏が担ってくれた。

実際の授業の様子は以下のとおりである。新しく昨年 9 月から赴任した英語の先生（以下、D 先生）が一緒に授業に入ってくださり、通訳（英語→タイ語）をしてくれた。

筆者が最初に挨拶、学生らの自己紹介を行い、その後は全て学生が主体となって講義を進めてくれた

児童 82 名が参加。この中には、もともと不登校だった児童もいる。現在は元気に登校しており、嬉しい。





なお、今回、アンケート調査を行った。アンケートは無記名・自由回答として、以下の４点を聞いた。

（１）学年

（２）今日の授業を受けて、新しい職業について知ることができましたか？

（３）今日の授業を受けて、勉強したい気持ちは高まりましたか？

（４）あなたが将来やってみたい仕事を教えてください。

なお、（２）（３）は５件法で、（４）は自由記述で回答いただいた。結果は以下のとおりである。

・回答率：100%（82 名）

・（１）　計 81 人（回答なし１人）

小学１年生	0 人	小学４年生	17 人	中学１年生	10 人
小学２年生	2 人	小学５年生	11 人	中学２年生	7 人
小学３年生	15 人	小学６年生	11 人	中学３年生	8 人

・（２）および（３）

回答	（２）	（３）
５.とてもそう思う	49 人（59.8%）	28 人（34.1%）
４.そう思う	25 人（30.5%）	44 人（53.7%）
３.どちらともいえない	8 人（9.8%）	7 人（8.5%）
２.あまりそう思わない	0 人	0 人
１.まったくそう思わない	0 人	2 人（2.4%）
無回答	0 人	1 人（1.2%）

・(4)

教師（28 人）、医者（17 人）、料理人（5 人）、CA（3 人）、（以下回答 2 人・順不同）警察、幼稚園の先生、歌手、ユーチューバー、ネイリスト、ボクサー、（以下回答 1 人・順不同）農家、ツアーガイド、有名人、看護師、整備士、作家、画家、アーティスト、サッカー選手、K-POP アイドル、弁護士であった（1 名、複数回答（教師と看護師）あり。また 7 人が無回答であった）。

以上、約９割が新しい職業について知ることができた、勉強したい気持ちは高まった、との回答であった。今後、学年と（4）の回答の関係を分析するなど、さらに詳細に考察していきたい。

4．料理教室の実施（3/7（金））

C 先生へ事前に「自由参加型のプログラムとして、3/8（土）に学校の調理場をお借りして料理教室を行いたい」をお伝えして、了承いただいていたが、国際福祉教育実施後に確認すると、「明日は学校が休みのため難しい」との回答。このため、急遽、同日にそのまま料理教室を実施することとなった。

また、当初「とんかつ」を作る予定であったが、3/6（木）の買い出しの際に、「猛暑（日中は 35℃前後）の中、また村まで 120km 移動する間も含めて、3/8（土）まで豚肉を保管することは危ないのではないか」と、学生らと再検討をした。そこで協議の結果、素麺とどら焼きを作ることとした。

当日の様子は以下のとおりである。途中、水道管が破裂して素麺がゆがけない（冷水が足りない）等のトラブルもありつつ、現地の先生方がお水を用意してくださったり、どら焼き用の牛乳を急遽持ってきてくださったり（保管の観点から、水で調理を検討していた）と、最大限の協力を得て実施することができた。素麺は学生らでゆがき、提供することとして、主にどら焼きを子どもたちと一緒に作り、あんこやジャムなど、好きな具材を入れて食べてもらうこととした。

C 先生、D 先生や学生らとともに

5．職業体験の企画の打合せ、および寄付金について（3/7（金））

3/7（金）の料理教室実施後、8 月の職業体験企画の打合せを行うことを検討したが、時間もなく、またメールでのやり取りとなった。ここでは、D 先生（新たに赴任した英語の先生）にもグループに入っていただき、筆者、学生、先生らでやり取りができるようにお願いをした。

寄付金についても、企画の中身が定まった以降、お渡しをさせていただくこととなった。今後、新 4 年生のゼミを中心に、企画内容を詰めていくこととした。

なお、筆者の都合上、水曜日に会議があり、木曜日にチェンマイ都市部到着、そこから A 村への移動（木曜日の夜到着）で、前回同様今回も金曜日学校到着となってしまった。しかし現地の先生方は、自身の居住地（チェンマイ都市部）に帰る必要があり、夕方 17 時前には学校を出てしまう。

また今回、渡航の都合上、月曜日の夜には空港に着く必要があり、今回は月曜日に学校訪問も難しい現状があった。日本での仕事との調整上難しい現状があるが、可能な限り平日に渡航し、学校に居られる時間を多く取りたい。

6．村あるきを通した不登校児童の現状について（3/8（土））

本日予定していた料理教室が昨日実施できたため、本日は村で子どもたちとゆっくりと過ごす時間をとることができた。山頂の宿のオープンスペースでパソコンを広げ仕事をしていると、子どもたちが寄ってくる。学生らの化粧道具に興味を持ち、学生らとともにメイクタイム。

その後、昨日「観光案内人」という仕事を紹介したことに再度触れつつ、子どもたちに「学生らへ村内を案内してほしい」ことを依頼し、朝食後一緒に村を歩いてまわることに（リス族の中でも、子どもたちは学校教育の影響によりタイ語を使うことができるが、大人（特に高齢者）の中にはタイ語の使用がやや難しい方もいるため、子どもたちが通訳を行ってくれている）。

この道中、以前訪問したことのある不登校世帯（２世帯。うち１世帯の子どもは、すでに学校に通うようになっている）の家へ「遊びに行く」こととした。

○E 世帯（加藤（2024）内「H 世帯」）

以前、「世帯の貧困問題」など家庭環境の影響により学校に来られていない E 世帯の子どもについて、家庭環境が若干変化し、今は毎日学校に来ることができていることを確認した。

現在も継続して学校に通っており、昨日も学校で挨拶をすることができた。また訪問時は、本人の兄弟らと会うことができた。話を伺うと、現在、もともとの家のすぐ近くに借家を借りて生活しており、その理由としては、もともとの家を一旦壊し、新たに家を建てるとのことであった。同世帯は、離婚によるひとり親世帯であり、世帯の経済状況も不登校の一要因として考えられる世帯であった（現在は世帯状況が安定している様子）。

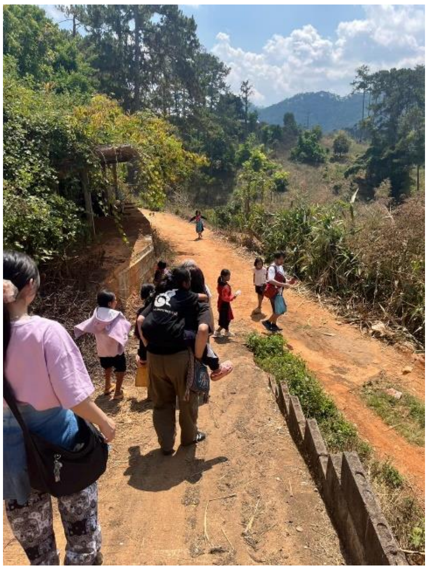
○F 世帯（加藤（2024）内「J 世帯」）

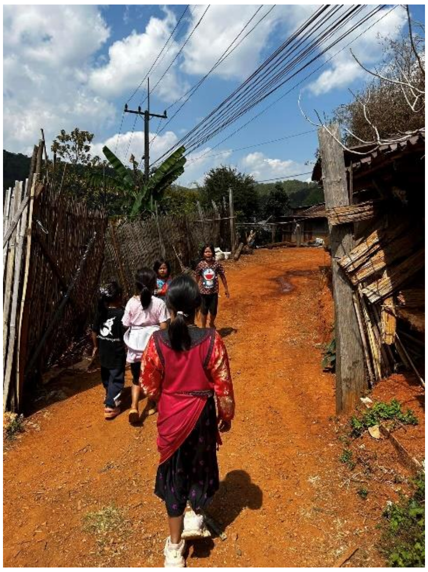
子ども（以下、G さん）が「ヤングケアラー状態による不登校」状態にある F 世帯へ訪問（G さんの父がドラッグで刑務所に入ったことをきっかけに母が数年前からうつ病に罹患。その世話のため G さんはなかなか学校へ行けない現状がある）。

G さんは不在であったが、母親に会うことができた。最初は、やや表情が硬く、話しができるかわからない雰囲気であったが、同行した子どもたちが筆者らを紹介してくれ、話を伺うことができた。以前、G さんから「お母さんが交通事故にあった」と聞いていることを伝え、体調について尋ねると「首の痛みがまだある」とのことであった。日本からのお土産（お菓子）をお渡しして「お大事にしてください」と伝え辞去。

なお、その後 G さんから連絡があり「お菓子をありがとう。私は今、家にいないです」とのことで、祭り会場の写真が送られてきた（その後、会場で G さんを見つけることはできなかったが）。帰国後、やり取りをするなかで「学校は好きですか？」と尋ねると、「好きです」とのことであった。

また村あるきの道中、ある子どもに話を聞くと、「（G さんが学校になかなか来ない理由は）わからない」とのことであった。





写真左：村あるきの中で、いくつかのフルーツを木から取って食べさせてくれた（やや美味しかった）。
写真中央・右：子どもたちが一緒にいるおかげで、どの家庭も警戒されることなく話を伺うことができた。

７．伝統的なお祭りへの参加（3/8（土）、9（日））

年に 1 度、旧正月の伝統的なお祭りが開催されており、タイミングよく参加をさせていただくことができた。リス族の衣装を貸していただき参加。村から 5km ほど離れた広場（近くに飲食店もあり、以前実施したインタビューでは、教員が平日夜、同飲食店を利用するとのことであった）に近隣に住むリス族が集結し、２日間、音楽に合わせて踊り続けるというものである。二重の円となってそれぞれが手をつなぎ、独特なステップを踏みながら半時計まわりに回り続けるものである。体力がなくても参加できる踊りであった。

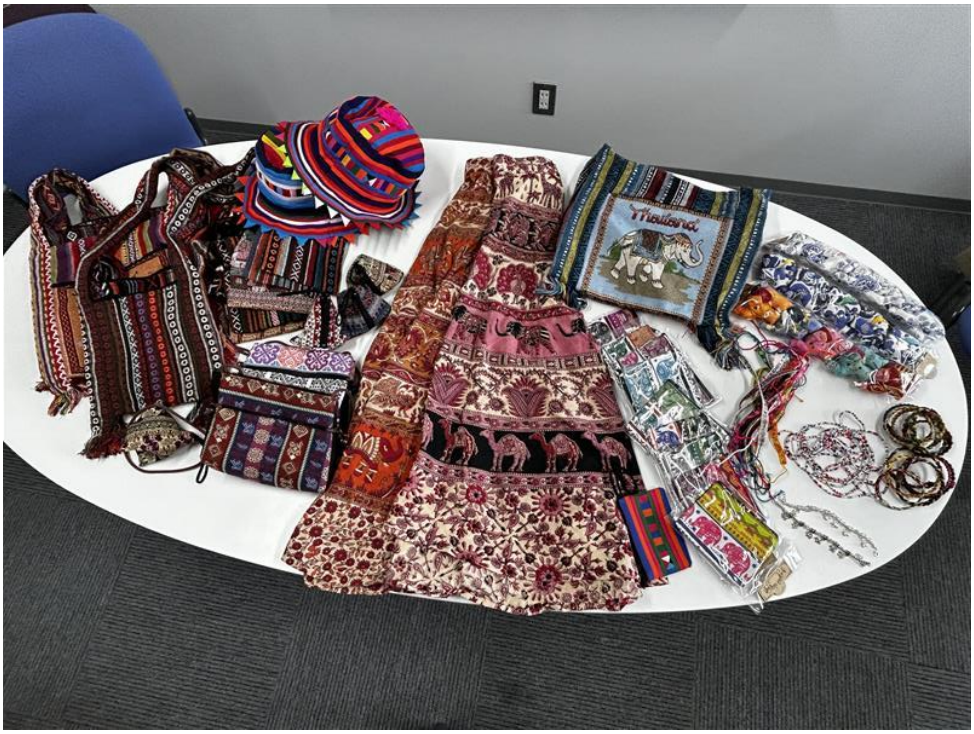
※この祭りの意味等については、また文献等で詳しく調べてみたい。

お祭りの様子。屋台も数十店立ち並び、とても楽しい雰囲気であった。

8. ③リス族が作ったものなどの購入

月曜日（2025.3.10）を中心に、ポーチやミサンガ、小物入れなどを購入。これらをまた学園祭等で販売し、売り上げを「職業体験企画」の原資とすることとした。

糸を縫い合わせて商品を作るリス族（左上）。商品選びは学生担当（右上）。購入した物（下）。



9. リス族の現状に関するヒアリング

（１）A 村周辺のカフェ「Akipu Coffee」にて（3/9（日））

A 村から 8.5km ほど離れたところにあるカフェ「Akipu Coffee」。そこでは、コーヒー豆の栽培から焙煎まで全て自社で行っているとのこと。そこで、コーヒーを淹れてくれた店員（以下、H さん）に話を聞いた。

H さんは、20 歳の女性。リス族。高校を卒業後、この店で働いている（高校へ行く生徒はみなチェンマイ都市部にて生活することが基本である（チェンダオ周辺に高校がない）ため、恐らく高校卒業後、チェンダオまで戻ってきたと考えられる）。

ここのお店で、毎日働いているとのこと（雇用形態は不明）。髪の毛は「自分で切ったり、カラーリングしたりしている」とのこと。将来の夢について尋ねると、「明確な夢はないが、いつかチェンマイへ行きたい」と。また「リス族とは結婚したくない」「チェンマイでタイ人と結婚したい」意向。この理由について尋ねるも、明確な理由はないとのことであった。

以上のやり取りを、英語でほぼ問題なくやり取りができた（高校までいける能力があるため比較的頭がよい可能性あり。また専門書等が英語で記載されているため、英語能力が高まっている可能性もある）。

とてもおしゃれなカフェ。H さんのように働きたいリス族の子どもたちも多いのではないだろうか。

ここで飲むアイス・カプチーノは最高だった（過去一）。ご飯もとても美味しかった！

（２）伝統的なお祭りにて（3/9（日））

　リス族の高校２年生（以下、I さん）へヒアリング。もともと I さんが中学 3 年生の頃 B 学校で会ったことがあり、久しぶりの再会（2023 年３月：訪タイ報告書（3 回目）参照・父親は日本人であるが、数年前に逝去）。現在は都市部にて生活している。将来の夢について尋ねると、「大学に行きたい」とのこと。そこで大学で何を学びたいかについては現時点では未定だが、その後は「日本に行きたい」と話してくれた。

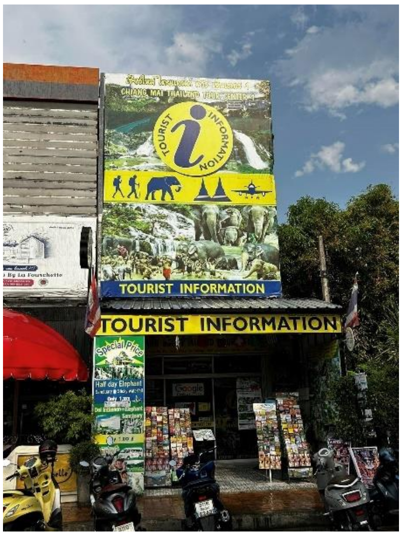
（３）チェンマイ都市部にて（3/10（月）、3/11（火））

・チェンマイ都市部の旅行代理店にて

　リス族のプログラムについては「ない」とのこと。

・マッサージ、ネイリスト、現地の高校生

　リス族は知っているが、リス族の友達や同僚はいない、とのこと。



10．同行学生の感想

○山本桃花さん（4 年生のゼミ生・副ゼミ長）

今回は 2 回目の参加でしたが、前回と比べて現地の子どもたちや先生との距離が縮まったと感じました。学校内だけではなく、村内や参加したリス族のお祭りなど学校外でも声をかけてくれたことであったり、就職したため今回の活動で最後になるかもしれないと話したところ、現地の先生から伝統的な髪飾りのプレゼントをいただいたりしました。このことから、前回の活動で形成されたラポールが今回まで継続し、さらに強い関係性を築くことができたと感じました。

それに加えて、不登校の生徒に対する支援の難しさを実感しました。村あるきのなかで、不登校生徒の家を訪ねたときに、その子がどんな課題を抱えているか、なぜ学校に来られないのかをほかの生徒も知らない様子でした。そこで、閉鎖的な村で課題やニーズが埋もれてしまっているため、さらに解決に時間を要するのではないかと感じました。また、以前家庭の経済状況の影響で不登校であった生徒が「学校が好きか」と聞かれ、「好きではない」と話していたけれど、現在は学校で積極的に活動や授業に参加している様子が見られ、本当に学校が好きではなかったのかと疑問に感じました。そして、家庭の状況を考えて「学校が好き」、「学校に行きたい」と言い出しづらい状況に置かれていたことがあり、生徒の本音を聞き出すこと、子どもたちの意思を実現させることの難しさを感じました。環境などが要因となるような、支援につながらないケースに対する介入のあり方を考えていく必要性が日本にもタイにもあると考えました。

これまで、ゼミで子どもたちがどうしたら将来の夢を描けるか、そのプロセスを知ることができるかについて考えてきました。最初は、村から都市部に出ることで仕事の幅が広がったり、より高い収入を得ることができたりして、それが幸せにつながるのではないのかなと思っていました。しかし、実際に現地に行ってみると、都市部で高等教育を受けたり、働いたりするだけではなく、村でできる仕事や役に立てる仕事があることに気づきました。子どもたちの状況を変えるというよりかは、一人ひとりのしたいことを見つけることや子どもたちの夢を応援できるような実践が望ましいのではないかと考えました。また、この活動の成果は、10～20 年経ってからしか見ることができないと思いますが、異文化交流であったり、福祉教育を継続したりしていくことで子どもたちに何らかの形で良い影響が与えられるといいなと思います。

○安並詩さん（3 年生のゼミ生・副ゼミ長）

今回初めて A 村を訪れ、村のリアルな現状を目の当たりにしながら、現地の子どもたちとの交流や村の祭りへの参加を通じて、多くの学びや気づきを得ました。

1．学校訪問で感じた違和感

学校を訪問した際、先生たちの子どもたちへの態度に違和感を覚えました。例えば、料理教室の準備中、子どもたちはキッチンに入る際に靴を脱いでいましたが、先生たちは靴を履いたまま入っていました。私も初めは子どもたちに倣い靴を脱いだが、後から来た先生に「靴を履いたままで大丈夫ですよ」と言われ、戸惑ったことを覚えています。このことから、先生たちが無意識のうちに子どもたちを下に見ているのではないかと感じました。一方で、先生たちはとても親切で、私たちの活動をサポートしてくれたため、ホスピタリティの精神が強いことも感じました。

2．村の人々のつながりの強さ

A 村の住民同士の関係は、縦（家族や年長者との関係）・横（近隣住民との関係）ともに非常に深いと感じました。私たちが滞在したホームステイには、毎日のように近所の子どもたちが遊びに来ており、大人たちもそれを特に制止することはなかったです。このことから、普段から家を行き来する文化が根付いていると感じました。また、自給自足の生活を基本としているからこそ、助け合いの精神が強く、ご近所付き合いが密接なのではないかと考えました。

3．子どもたちの距離感

子どもたちとの交流の中で、日本の子どもたちと比べて距離感が近いことに驚きました。初対面にも関わらず、子どもたちは私たちに抱きついてくることが多かったです。最初は「人懐っこいな」と思っていましたが、日本ではあまり見られない行動であることに気づき、「不安や恐れ、甘えの表れではないか？」と感じました。子どもたちの家庭環境や学校での悩みなどが影響している可能性も考えられ、今後さらに深く理解する必要があると感じました。

また、以前の報告書で「学校が好きではない」と言っていた子が、現地では楽しそうに通学している様子を見て、本当に学校が好きではないのか疑問に思いました。家族を大切にする文化が強い A 村では、家庭の事情で学校に行きたくても行けない子どもが他にもいるのかもしれないです。この点についても、今後 さらに探る必要があると感じました。

4．G さんの不登校の背景

村あるきの際、うつ病を患う母親を持つ G さんが、前回の訪問時と変わらず不登校であることを知りました。G さん本人には会えなかったですが、母親と話をする機会があり、彼女が交通事故の影響で首を痛め、安静にしていることがわかりました。G さんは学校が嫌いなのではなく、家庭の事情で現在も通えない状況にある可能性が高いと感じました。また、村の子どもたちも G さんが学校に来ない理由を知らないようでした。子ども同士でさえ、全てを把握しているわけではないことを実感しました。

5．A 村での学びと今後の活動

A 村での経験を通して、村の魅力を感じると同時に「幸せの形は人それぞれである」ということを再確認しました。今後私たちは「職業体験ツアー」を開催しますが、それは子どもたちに職業を強要するのではなく、将来の選択肢を広げるための機会とするべきだと強く感じました。村には、伝統を大切にしたい人、家族と健康に暮らすことを何よりの幸せと考える人、医者や先生を目指す子どもなど、さまざまな価値観があります。「職に就くこと＝幸せ」とは限らないからこそ、職業体験ツアーが子どもたちに新たな選択肢を示すきっかけとなるよう、しっかり準備を進めたいと改めて思いましたし、10 年後・20 年後の子どもたちの姿が私たちの活動の答えにもつながると感じました。だからこそ、今回の訪問を通して得た学びを活かし、10 年後・20 年後の子どもたちの未来に少しでも良い影響が与えられるよう、今後の活動に取り組んでいきたいです。

○森奈留美さん（3 年生のゼミ生）

今回のタイ訪問でさまざまな経験をし、他の学生との意見交換を通して、自分の考えの偏りに気づき、物事をより広い視点で捉えられるようになりました。

国際福祉教育では、職業クイズを中心とした授業と、そこで紹介した料理人の仕事体験（日本食を知ってもらう機会づくり）として体験教室を行いました。この授業に参加したことで、言語が違う国で人と交流する難しさを実感しました。生徒たちに資料を配る際、「紙を後ろに回してね」や「紙を２枚貰ってね」など簡単な言葉でも翻訳機を通す必要があるため、英語と身振り手振りやハンドサインで伝えていました。しかし、身振り手振りでは上手く伝わらないことがあり、苦労しました。

仕事体験では、どら焼き・そうめんを振る舞いました。計画では、参加者をグループ分けして、自分たちで生地を混ぜて焼いて食べて貰うはずでしたが、焼くところが二つしかなかったため、生地を混ぜる体験だけして貰い、自分たちが焼いたものに餡子やジャムを挟んで食べて貰う形になりました。計画通りにはいかなかったですが、順番に生地を混ぜたり、子どもたちが楽しそうに参加しており、また数人は焼く体験ができたりもしたので、良かったです。

しかし、反省として、水を多く使うそうめん作りは、飲み水が限られる A 村では適さなかったのではないかという意見が出ました。茹でたそうめんを洗うのに、予想以上に多くの飲料水を使ってしまい、資源を大切にする意識が欠けていたことを痛感しました。この経験を通し、現地の環境や状況を考慮して行動する重要性を認識することができました。今後は、限られた資源をどのように使うべきかを意識し、慎重に行動する必要があると感じました。

村あるきでは、宿に遊びに来ていた子どもたちに案内してもらい、不登校児宅への訪問を行いました。泊まった宿は、村の上の方にありましたが、学校がない日は朝から部屋に来て、遊びに誘ってくれました。久しぶりに鬼ごっこをしてすぐバテてしまいましたが、妹と弟が沢山できた感じがしてうれしかったです。なので、子どもたちもいい遊び相手として捉えているのだと思っていました。しかし、他の学生から「子どもたちはハグをしたり、おんぶをせがんだりと、関わりを通して言葉ではない何かを伝えようとしていると感じた」という意見から、私自身の考えが偏っていたことに気づかされ、発言や行動の裏にある意図を考える必要があると学びました。

A 村は、山を切り開いた土地に住宅を建てており、村の入り口から続く道沿いに家が並んでいました。入り口付近の通りには、売店が 3 つとカフェがあるなど、想像していた村とは違いました。また、入り口から続く道から分かれた道には家畜小屋があり、ブタ・ニワトリが飼育されていました。A 村訪問 3 日目に食べた料理にニワトリの足が入っているものがありました。普段見慣れない部位を口にすることに驚きましたが、それだけ食材、資源を大切にしているということが伝わってきて、自分たちが育てた動物を食べるとはどういうことなのかを村の人から学ばせていただきました。

実際の A 村訪問で、沢山の気づきがあり、自分自身成長が出来たと感じています。他の学生と意見を交流することで相手の行動の背景や意図を読み取る力の重要性にも気づき、それを意識して感想をまとめることで、学びが深まりました。今回の経験を、今後の福祉の学びや実践に活かしていきたいと感じています。加藤先生が A 村で行っている問題解決のためのきっかけ作りは、日本で生きづらさを感じている人達にも有効であると感じ、地域資源を使い、どう支援に結びつけているのか事例を通して考えていきたいと思いました。

また、職業体験ツアーを実施する上での課題や気をつけるべき点についても、国際福祉教育の授業を見学したことで多くの気づきがありました。今回のタイが初めての海外渡航で、不安が大きかったのですが、同行した学生と加藤先生のおかげで楽しみながら学ぶことが出来ました。また、A 村に行きたいです。

○加藤愛梨さん（3 年生・実習指導等で関わっている学生）

今回の活動で私は現地に足を運び自分の目で確かめることの重要性を学び、A 村での生活や A 村の人々について自分の体験を通して理解することができました。4 泊 5 日の A 村での生活の中で特に印象に残った出来事を 2 つ取り上げたいと思います。

１つ目は A 村の生活状況についてです。A 村はチェンマイという都市から 2 時間半ほど離れた山の中にあります。A 村には売店が３つほどあり、電気や電波は通っていますが病院や公共交通機関はないため病院に行くためにはチェンマイの都市まで車で行かなければなりません。家は急斜面に作られているため急な坂を登らなければならず、高齢者の方々が上り下りをするには体力がとても必要だと感じました。小学生の子ども達も沢山おり、高齢化が進んでいる町には感じられませんでした。ですが将来、仕事のために都市部のチェンマイに住み、出稼ぎに行く子がいることを知りました。村からチェンマイに流れ出ることで村より稼ぐことができるメリットはありますが、チェンマイで風俗や大麻を売る人になる子がいるということで村での教育が将来を大きく左右すると考えました。これらのことから私たちが出来ることとして、今回行った国際福祉教育実践や日本料理を振る舞うことなどを通して、世の中の職業を知ってもらい勉強への意欲を高めることや日本への興味を持つことのきっかけになれば良いと思いました。

２つ目は村のお祭りについてです。今回ホームステイ先に訪問した際に分かったことなのですが村のお祭りがあるということで参加させてもらうことになりました。ホームステイ先の方から村のお祭りで着る服を貸してもらいお祭りに参加しました。ホームステイ先から離れた高い山に移動し、中心を囲う形で円になり、隣の人と手を繋ぎ笛のような楽器を使った音に合わせてダンスをしながらぐるぐる周っていくものでした。決まったダンスの動きを永遠に繰り返していくもので 1 日中通しで、2 日間行われるようでした。見知らぬ日本人が来ても特に警戒をするわけでもなくダンスの輪に入れていただき、そのダンスを踊っている間私は A 村の住民になれた気がして嬉しかったです。高校生ぐらいの子や高齢の方、小学生も沢山おり、村一体となり、祭りを通して住民同士の繋がりを繋ぎ続ける場があるということに感激しました。この場で新たな人間関係の輪が広がったり談話の輪が作れたりなどあるのではないかと考えました。これらのことから A 村では世帯を超えた地域でのつながり合いが強いと感じ、お互いに支え合いながら生活しているのではないかと祭りに参加することで感じられました。

私の中で今回の活動は自分自身の人生に大きく影響を受けた出来事であり、良い経験でした。A 村はインフラ整備や施設が整っていないなど自分の住んでいる町と比べるとデメリットな部分もあるかもしれませんが、地域住民との繋がりは自分の住んでいる町より多いと感じました。私は自分が住む町の良い部分と A 村の良い部分を掛け合わせ、より良い地域づくりが出来たらいいなと考えました。自分自身の課題として、タイ語を話せることができればラポール形成に繋がると深く感じたのでタイ語の勉強も始めようと思っています。

改めて、リス族の皆さん、A 村の学校の先生方、ホストファミリー、加藤先生、同行したゼミメンバー3 人の皆さんに感謝申し上げます。様々な経験、考えを人を通して吸収することができました。本当にありがとうございます。また A 村に行きたいです！

11．今後の活動予定について

〈2025 年度〉

困難を抱える子どもやその世帯について、教員や村人とも協働し個別支援を行う。また並行し、国際福祉教育実践（２年目）をさらに展開していく。

加えて、困難を抱える子どもたちやその世帯、また「学習意欲の低い子どもたち」など子ども全体への働きかけとして、学校と協働して「職業体験企画」を実施する。

〈2026 年度〉

これまでの個別支援、地域支援実践を振り返り、継続しつつ、日本において国際協力オンライン交流授業の準備を行う（日本側の受け入れ体制の整備、事前学習プログラムの検討・実施）。

〈2027 年度〉

個別支援、地域支援実践を継続しつつ、国際協力オンライン交流授業として、日本の小・中学校とのオンラインを通した相互援助活動を展開する。

〈2028 年度〉

個別支援、地域支援実践を継続しつつ、これらの活動が地域内で維持・継続されるための「継続性を担保するための仕組み化」を検討していく。

11．まとめ

今回も、大きなトラブルなく渡航を終えることができた。また急遽料理教室の実施日が変わるなど、前回同様柔軟な対応が求められることもあったが、B 学校の先生方のご協力や学生たちの力によって無事に実施することができた。事前連絡では、メールのみでのやり取りであり、必ずしも意思疎通がうまくいくわけではないが、今回から C 先生だけでなく英語を担当する D 先生にも入っていただくことができた。

また SIM カードではなく、急遽 eSIM を採用することとなったが、B 学校でもインターネットを使うことができ（ただし、山間部は SIM カード同様ネット接続ができなくなってしまうが）、翻訳等を行いやすかった。

同行した学生らは、とても楽しみながら本研究渡航に参加してくれた。学生らが本気で楽しむことで、子どもたちも一緒に楽しむことができたり、ホームステイのオーナーらもとても喜んでくれたりしていた。改めて、学生らにも感謝したい。また Akipu Coffee や国立公園など、チェンマイ都市部だけでなく A 村周辺のチェンダオも、観光として旅行に行くにもとてもおすすめの場所である。是非皆様も一度、足を運んでみてほしい。

購入した物資を学園祭等で販売し資金を集めつつ、SNS 等を通じて周知・啓発を継続していきたい（新年度 4 年次ゼミ）。そして、国際福祉教育や職業体験企画が継続実施できるよう、基盤整備を図っていきたい。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
また本プロセスに関わるすべての人に、感謝申し上げます。

加藤　昭宏

＜参考文献＞

加藤昭宏（2019）「訪タイ報告書」
https://www.doho.ac.jp/images/pdf/professor/a_kato01.pdf

加藤昭宏（2019「訪タイ報告書（2 回目）」.
https://www.doho.ac.jp/images/pdf/professor/a_kato02.pdf

加藤昭宏（2023）「訪タイ報告書（3 回目）」
https://www.doho.ac.jp/images/pdf/professor/a_kato03.pdf

加藤昭宏（2024）「訪タイ報告書（4 回目）」
https://www.doho.ac.jp/images/pdf/professor/a_kato04.pdf

加藤昭宏（2024）「訪タイ報告書（5 回目）」
https://www.doho.ac.jp/images/pdf/professor/a_kato05.pdf

加藤昭宏（2024）「タイ・チェンマイの中山間地域におけるメゾ・マクロ実践に関する予備的調査」『同朋福祉』（31）：135-157.

加藤昭宏（2025）「タイ・チェンマイの中山間地域に住むリス族の現状と課題に関する一考察」『同朋福祉』（32）：83-101.

付録：活動記録写真

イラストレーターの海道建太氏。最大限の協力を得て完成した。
海道氏とは「今後、これを教材化して、もっと広めたいよね」と話。
ご協力いただける企業や団体がありましたら、是非ご連絡ください。

筆者の行きつけのタイカレー屋さん。北タイの名物
ゲーンハンレーという豚肉と生姜のカレー。美味。

21 時前に A 村に到着。やはり移動だけでまる
1 日は必要。

宿までの坂道。

A 村の朝、夜明け前。筆者が 1 番好きな時間。

ホームステイのオーナー。
とても親切で、頼もしい存在。

A 村とつないでくださった方のお母さん。現在 85 歳。
毎回、挨拶をさせていただく。いつまでもお元気でいてほしい。

移動は基本的に荷台。
35℃の炎天下で暑かった。

ホームステイのオーナーがつくる
朝ご飯はとても美味しい。

旧正月に食べるお餅のような
食べ物。ほんのり甘い。

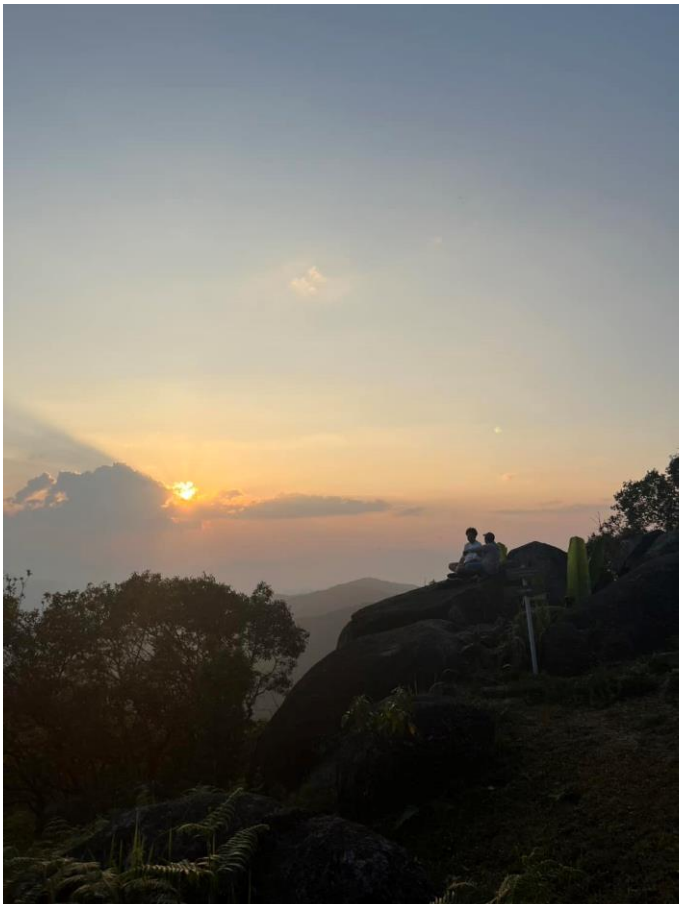
宿。たまに、虫が出る。
大きな蜘蛛やトカゲなど。

宿の周りも大自然。とても空気が良く、太陽が大きい。

Akipu Coffee にいた子犬。

Akipu Coffee からの眺め。どこも空が広い。

本活動が、いつか実を結ぶことを祈って。



ホームステイのオーナーとの一枚。